



木下奎太郎全集

第十九卷

木下李太郎全集 第十九卷

第十一回配本(全二十四卷)

一九八二年三月一八日 発行

定価 三八〇〇円

著 者 太田正雄おおた まさお

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五十五
発行所 鐵岩波書店

電話 〇三・六五・四二一
振替 東京六二六四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

窓に立つ人	ホフマンスタアル	一
曹操殺父執 さうさうちやうのともをころす		二三
チチアンの死	ホフマンスタアル	四五
黛玉葬花 たいぎよくはなをほむる		五九
愛	キルドガンス	七三
エグモント	ゲエテ	一六三
上顎の間骨は動物と同じく		二八七
人間にも認めらるべきこと	ゲエテ	二九七
日本の劇場の舞臺遠近法	グラアザア	三九
日本演劇の型に就て	グラアザア	三五
東京の市街	グラアザア	四一

ケルン市に於ける國際美術展覽會	フォルトラアゲ	三三七
瓶の把に就て	ジンメル	三五一
ロダン論(メニエエ論)	ジンメル	三六一
「日本に於ける歐羅巴劇」の講話	ハアゲマン	三七九
新印象派論	マイエルリグレエフェ	三九五
後記		四一三

窓に立つ人 (Hugo von Hofmannsthal)

人物

ブラクチオ

デアノラ夫人

乳母

嚴めしきロムバルド風の館の庭に面せる側。向つて右に家の壁あり、背景のやや高き垣と鈍角をなし交はる。家は人の背の一倍半ほどの高さまでは粗き野面石より成り、その上に滑かなる層、またその上に大理石の蛇腹あり、是は各の窓の下にては浮彫の獅子の面の金物を附けてゐる。二つの窓あり、各小さき角形の出窓を持ち、其石の欄干には前面に間隙ありて、この觀樓に立つ人の脚を見ることが得。二つの窓には、その後ろの室との境に窓懸あり。庭は芝生にて果樹斑々に植ゑられてあり。垣と家との出あふ隅には暗き黄楊の叢茂る。舞臺の左側には葡萄棚あり、數株の栗の木にて支へらる。是は唯其入口が見ゆるのみにて、其餘は斜めに後方に走つてゐる。庭はまた見物の方にも擴がりて居る心持、後方の垣の後ろには（二階正面棧敷の觀客より見らるる）細き道あり、その後ろに尙ほ持主もなしと見ゆる庭の垣あり。その庭及び遙かその後方は唯亂雜に茂れる果樹の夕日を浴びたる梢を見るのみなり。

デアノラ夫人（後方なる窓にて。）葡萄畠の作人が丘から歸つて來はくるが、でもあれが一番最後の人と云ふんでは無いんだよ。だつてもそこ此處にまだ三人、後に残つてゐるんだもの。えええ、ではまだ暮れはしないんだねえ、明るい日は。お日様、わたしはあなたの手から、半分開けてゐるあなたの手から「時」をもぎ取つては碎きました。小さい缺片に碎いては流れる水に投げました。ちやうど今この花を引き裂いてはするやうに——。ええ、ま、わたしはこの「朝」に早く去つて貰はう思つてどんなに追従したか分りはせぬ。どの腕環も、どの耳環も一遍懸けてはまた外し、だがまたそれを取つちやつて、全く他のと取り換へたりして……。それから浴室へ行つて綺麗な水をどつさり頭へ掛け、ゆつくり、ゆつくり髪の毛を絞つたりなんぞして……。そのあとではまたゆつくり、石垣の下の細道で日に乾かしながらあちこちと歩きました。けれどもいつまでも濡れてゐたのよ。そんなに濃いね、髪の毛が。それから庭の、樹の隧道の中で山雀の巢を搜したりなんぞもしましたの。吹く風の呼吸よりも柔かに、さ揺ぐ蔓を掻い分けて頭へる叢に腰かけました。そのうちだんだん頬や手に、温い日光の小さい星がゆらゆらと、それはそれはゆつくりゆつくりと、匍つてゆくのが分つたのよ。半分眼を閉ちてゐると、そんなに動いてゆくのが皆替なのかと思はれました。かうまぎらはして居たけれども、そのうち我慢も爲きれないやうになつてしまひました。しかたがなさ眼を上げて、空飛ぶ雁を峻相に凝視めたり、水の流れに身を屈め纖弱い體を寫したりなんぞすれば、暴い流は倉皇しくわたしの影をも流してゆく。それでも何でも何でも怖へませう。わたしは辛抱強いよ。聖母さま、聖母さま。どんなに峻しい高山でもわたしは登るのを厭ひませぬ。一足ごとに跪いて、この眞珠の緒で山道の尺を取るのも厭ひませぬ。唯この日さへ、この日さへ早く沈んでくれるのなら。だつてあまり長過ぎるんだもの。もうわたしは小さい鎖で幾千度測り直したか知れはしない。その揚

句には熱病の時のやうに獨言を言ひました。いくら幹に残つてゐる木の葉を數へなほしてもすぐもう終へてしまふのですもの。おや、まあ、あすこで老人が犬を内へ呼んでゐる。なるほどあの家の小さい庭は陰つたのね。あの人は恐がつてゐる。犬をうちへ閉め入れて、たつた一人ではいつて行く。あの人にはもう夜なんだよ。だけどそれを喜んでゐないのね。いまだ少女たちも井戸に行く。虚の水桶の竿を下すのさへいちはつきりと見えるわね。一番しまひのが一番美しいわ。おや、何をするだらう、あの人は。あの何處かの旅人は——辻路で……。きつともつと今日中にたんと行かなければならないんだよ。石の上へ足を置き、脚布を取つてゐること。あれも一つの生活ね。さう、さう、それなら、足から刺だけを取つてお置きなさい。あなたはお急ぎになるでせう。世間ではみんな急がなければなりません。だから今日の熱い日も沈むがよい。わたしたちの頬からも熱いほてりが消えるがよい。わたしたちを苦しめたり、邪魔したりするものはみんな去つてしまふがよい。刺は野原にお捨てなさい。ちやうど野原には井戸の中に水が湧き、大きな花のいく群が夜を迎へてしらじらと映えわたつてをりますよ。わたしは手から指環を抜く。すると裸になつた指たちは、川で水を浴びても可いといはれて著物を脱ぎ、夕方川へと急ぐ子供たちのやうに嬉しがる。——もう皆井戸から去つてしまふ。一番おしまひのがまだ一人残つてゐる。美しい髪の手を持つて居るのね。だけどそれがどんなに良いことかは知つては居ない。それはきつと自慢でせう。だけど自慢なんぞは無益の年頃のつまらない戯れよ。一度わたしのやうな身になつたなら、始めてそれをいくしむやうになるでせう。ちやうど絃の音のやうに、忍びやかな囁語、また愛人の熱の手の手觸を後に残してふさふさと垂れかかる髪の手を……。

自らの髪の手を解き、左右に分けて前に垂らす。

ええ、其方たちはわたしの所で何をするぞい。皆落ちてしまふがよい。迎へにお行き。暗くなつてからあの人の手が梯子に懸るとき、虚な空氣に觸るより、冷い、堅い、あの黃楊の葉に觸るより、日暮黄金の雲間から降り出づる霧雨よりも柔かな其方たちに直ぐと觸るがよい。

髪の毛を胸壁から下へと垂らす。

そんなに長いね、それでもこの道の三分の一までも達しはしない。一番の尖のところが冷い大理石の獅子の鼻孔までも届きはしない。

笑ふ。再び身を起す。

おや、蜘蛛。いいえ、わたしはそなたを振り落しなんぞはしないのよ。そつとかうまた欄干に手を置くわ。そなたもまたさう急ぐのならこの道を續けてお歩き。まあ、どんな變りやうだらう、魔法でも懸けられたやうね。もとならわたしは唯籠の縁をこの蟲けらが匍つて行つたと云ふばかりで中の木の實に觸れもせなんだらうにねえ。さあわたしの手の上を通つてお行き。わたしはすつかり酔つてゐるのよ。そなたの歩くのさへも嬉しいほど。今ならわたしは石垣の狭い縁をも通りませう。庭を歩く時ほど恐ろしいとは思はないでせう。もしまた水の中にでも落ちたならその中に居るのを却つて好い氣にするでせう。その冷い柔かな腕がわたしを捕へる。そして暗碧の底のある、薄暗い、綺麗な海草の家の中へ潜つてゆき、黄金の鱭、重苦しい、しかし善良な眼を持つた奇怪な動物たちとも遊びませう。また暗い森の崩れた外廊の中に閉ぢ込められて、日を暮しても構ひませぬ。心さへ狭まれないで居るのなら。そしたらきつと、森のけだもの、小鳥の群、田鼠なんぞが口先や、賢さうな眼許の睫を持つてきてわたしの素足の指に觸るでせう。わたしはまた苔の中の苺の實を取つて食べてゐませう。……おや何か音がする。ああ、はりねずみな

んだよ。あの初めての晩と同じはりねずみなんだよ。おまへはまた此處へ来たのかえ。聞か
ずから出て来たのかえ。是れから狩へ行くのかえ。はりねずみ。わたしの好きな狩人も直ぐ
来てくれれば可いのねえ。

ふと顔を上げて。

もう陰がなくなつた。どこにも陰が。松の陰も、壁の陰も、あそこの小丘の家々の陰も、
葡萄垣の大き
な陰も、辻路の無果樹の陰も、まるで静かな地の中へ吸ひ込まれたやうになくなつた。今度こそほんたう
に夜なのよ。それで人たちが燈を卓の上に置く。羊の檻には羊たちが押しあひしあひ這入つてゆく。ま
た葡萄の垣の、太い葡萄の幹のからまつて居る暗い陰には、美しい童の態をし、心は悪い河童たちがしや
がんで居る。森の立樹の隙からは善い聖者たちが出て來られる。己が寺々の立つあたりを見廻して、禮拜
堂の数の多いのを喜んで居られる。さあ、いよいよ惡らしい小道具よ。蜘蛛の巣よりもなほ細く、鏡より
なほ堅いそなたの出てゆく番が來たのよ。

絹の繩梯子の端を出窓の床なる鐵の鉤に繋ぐ。

さて、もう、いよいよの時が來たやうに、わたしはそなたを井戸の中へ落してやる、さあ、美しい水桶
を引き上げて來るが可い。

再び繩梯子を引き上ぐ。

もう夜だのに、夜だのに、あの方の來るまでにはもつと長く、限りなく懸るのかしら。

指をすまはせる。

懸るわねえ。

目を輝かせて。

さう懸つては可けないわ。だけどきつと懸るわねえ。

髪のを結んだりする。その間に乳母前方の窓に現はれる。そこにある赤き花に水を注ぐ。

夫人（非常にびつくりして）誰、そこに居るのは。ああ乳母なの。お前？……そんなに遅くまでそこに居たことは一遍もないのに……何かしたの……。

乳母 いいえ、ね、奥さま。まあ御覽下さいまし。花に水をやるのを忘れたのでございますのよ。晩のお祈りから家へ歸る途中で急に思ひ出して、急いでまゐつたのでございますの。

夫人 それなら水を遺るのが可い。だが乳母、お前はいつもとは違つて見えるわね。お前の頬は赤くなつて、お前の眼は輝いてゐる……。

乳母（返事なし。）

夫人 ねえ、乳母、あの坊さまはまだやつぱり説教してゐるのかえ。そら、あの……。

乳母（短く。）ええ、左様でございますの。

夫人 西班牙から來たのだつてねえ。さう？

乳母（返事なし。間。）

夫人（考へ事を續けて居る。）ねえ、乳母、わたしは子供の時分はどんなだつたらうねえ。

乳母 奥さま。大へんに高ぶつていらつしやるお子様でございました。

夫人（極低く。）をかしいわねえ。だけど慎しうと云ふ事がそんなに善いことかしら……ねえ、乳母。

乳母 そんな事は、奥様、わたくし些とも申し上げはしませんわ。

夫人 ああ、さう。ちや、ねえ、乳母、その人は誰に似て居るの。その西班牙の坊さまは。

乳母 あの人とは全く變つた人でございますよ。

夫人 さうぢやないのよ。唯、風采はつて聞くのよ。……うちの夫に……うちの旦那さまに似てゐるの。

乳母 いいえ、些とも。

夫人 それなら御舍弟さまには。

乳母 似て居ませんわ。

夫人 アントニオ・メルチイ様には。

乳母 いいええ。

夫人 ガレアツチヨオ・スワルヂイ様には。

乳母 いいええ。

夫人 パルラア・デリジイ・アルビツチイ様には。

乳母 あの方とは聲が少しばかり似て居ります。昨日も倅にさう申ししたのでございます。聲がどこやらパルラ

ア様のお聲に似通つて居るのねえつて……。

夫人 聲がねえ……。

乳母 ですけど眼は少しグモドオ・シチオ様に——うちの旦那様の甥御様に似てをります。

夫人 (無言。)

乳母 昨日階段の處でお遇ひ申しました。そこに立つて御出でございました。

夫人 (激しく。) え、パルラア様が。

乳母 いいえ、うちの旦那様がでございます。そしてわたくしに創藥を拵へるやうにとお言ひつけになりました

た。前まえのは悉すっかり皆お使ひになつてしまつたのでございます。まだ創はすつかりお治りにならないのでございますのね。

夫人 ああ、さう、あの、馬に咬きずまれた創きずなの。お前にそれを見せたかえ。

乳母 ええ。手の甲の所はもうお治りになつたやうでございます。ですけど掌てのひらの方にはまだ小さい瘰かさが一つ残つてをります。をかしな創でございますのよ。わたくしはまだあんなの見たことがございません。

夫人 どの馬だつたかしら。

乳母 奥さま。あの大きい、綺麗な鹿毛かかげなのでございます。

夫人 さうさう。わたし覺えてゐるわ。あれはフランチェスコ・チエレガアチイの婚禮の日のことだつたねえ。

からからと笑ひ出す。

乳母 (夫人を凝視す。)

夫人 御免なさいよ。わたしはつい他の事ことを考へたのよ。——さう、さう、あの時うちの夫ひとが、食事中に何かそんな事を言つてお出ででしたつて。片手を切きに包んで。あれはどうだつたと云ふのだつたねえ。

乳母 ええ、奥さま、何がでございます。

夫人 馬がどうかしたつて事なのよ。

乳母 あ、あれ。あなたは御存知ないのでございますか。まあ、奥さま。

夫人 その事をあの時食事に話して居られるやうだつたが……。だけど、善く聞ききとれなかつたのよ。だつてバルラア・デリジイ・アルビツチイ様さまがわたしの傍そばに腰かけて居て、笑談言いうて、それで皆みんなが笑つたか

ら、うちの旦那様が言ふことは善く聞えなかつたんだもの。

乳母 旦那様が馬繋所へおはいりになつた時にあの鹿毛が耳を立てて、齒をむいて急に手へ咬み付いたのでございますつて。

夫人 それから。

乳母 だから旦那様が拳固で頸のところをお撃ちになつたのでございますつて。さうすると大きな馬がまるで犬のやうによろしたのでございましたつて。

夫人 (無言。夢みるやうに前方を凝視す。)

乳母 それは。旦那様はお強いのでございますのよ。ここの貴族のうちでは一番お強くつて、それで一番智慧がおありなさるのでございます。

夫人 さうだらう。(始めて氣付きて。) だけど誰の事？

乳母 うちの旦那様の事でございます。

夫人 あら、さうなの。うちの旦那さま？ (軽く笑ふ。)

問。

……そしてその聲が美しい聲なんだねえ。だから皆あんな大きな薄暗いお寺の中で喜んで聴いて居るんだねえ。

乳母 誰のことで御座いますの、奥さま。

夫人 西班牙の坊さまの事なのさ。誰だつて言ふの？

乳母 いいえ、奥さま、それなら聲の故ではございませんよ。皆が聴くわけは。

夫人（もうそんな事は構はないのである。）

乳母 奥さま……ねえ、奥さま。皆の人がお使者の事で噂をしてゐるのは、あれは本當なのでございませうか。

夫人 お使者つて……どの。

乳母 コモからうちの旦那様の所へよこした使者のことでございますよ。

夫人 皆がどんな噂をして居るの。

乳母 どこかの羊飼が見たのでございますつて。

夫人 何を見たつて。

乳母 うちの旦那様がお使者のことを大そうお怒りになつて、コモからよこした手紙をお受取りにならうとな
さいませんでしたつて。だけど兎に角それをお取りになつて半分讀み懸けたままで、ずたずたにお破りに
なつて、それをお使者の口の前へ持つて行つて、是非にそれを嚙み込めと仰やつたのですつて。するとお
使者がまるで海老のやうに後退りをして、そしてまた海老のやうにぎよろつとした眼をしたので、それで
皆笑つたのでございますつて。その中でも旦那様のお舍弟様のシルキ才様が一番お笑ひになりましたの
ですつて。それから旦那様が厩から門前へ驛馬を引かせて、お使者に乘れとおつしやつたのに、お使者が
あんまりぐづぐづして居たものですから、大どもをおけしかけになつたのでございますつて。でお使者は
到頭二人の僕たちと逃げて行つたのでございます。うちの旦那様はそれから七人の人達と、犬を皆連れて
狩にお出でになつたのでございます。すると夕方アダ河の橋の上で——ワレダ市の境のところ——お館
へ狩からお歸りにならうとする旦那様とコモのひとが落ち合つたのでございますつて。そこへちやうどそ
の羊飼が通り懸つて、羊たちを馬に踏ませまいと、橋のそばの玉蜀黍畠へ追ひ込んで待つて居たのですつ

て。そして聞いて居ると、旦那様が大きな聲で、あ、あすこに食ふのを厭がつた男が居る。きつと水でも飲みたいと言ふのだらうとおつしやつたのでございますつて。一緒の人達のうちの四人が二人の僕へ組み掛り、あとの二人がお使者の脚を片一方づつ掴まへて鞍から持ち上げて揺り落さうとすると、お使者は氣違ひのやうになつて欄干へ掴まつて防いで居たのですつて。で一人へ食ひ付いて、着物と一緒に腕の肉を噛み切つたのですつて。アダ河はあすこの所は峻しい崖になつて居ります。まつ暗で、その上雨の多い山ゆゑに急流になつて居ります。到頭お使者はそれで二度と出て来ませんでしたつて。さう羊飼が話して居たのでございますのよ。

話を已めて物尋ねたき顔付にて夫人を凝視す。

夫人（陰鬱に。）そんなことはわたしは知つては居ない。

憂はしげなる容貌をすつかり改めて、夢みるが如き、また内心に喜あるが如き表情をする。

ねえ、もつとわたしに聞かしてお呉れ。どんな説教をするの。あの西班牙の坊さまは。

乳母 さあ、どう申し上げたら可うございませう。

夫人 何の事でも可いの。些しばかり。その方はそんなに色々なことをお話しになるのかえ。

乳母 いいえ、大抵いつも同じ事ばかりでございますの。

夫人 何の——そんなら。

乳母 主の意志への歸依と云ふことでございます。

夫人（乳母を諦視す。頷く。）

乳母 奥様。その事がお分りにならなければ可けません。それが一番の事でございます。

夫人 何に。一番の事？

乳母（話しながら花をいぢつてゐる。）その事が基だと言う申すのでございます。それが全生命で、その外には何も無いのでございます。凡ての物はそれから外れることは出来ません。さうまた明かに悟ることがたいへんな幸福だと申すのでございます。それが本當の實で、その外には實と云ふものは無いのでございます。日輪は輝く爲め、石は物言はぬ地の上に轉げる爲め、またありとある生物からは、各自の聲が出てはなりません。それを換へたり、それに倅たりすることはなりません。ある通りにならねばなりませんのでございます。

夫人（子供の物考ふる如き態す。）

乳母（窓を離る。）

問。

夫人 静かな池の中に、まるで自分で自分を捕へたやうに、まあいろんな物影が映つてゐること。常春藤が薄暗の中を匍つて行く。垣を十重二十重に巻き付ける。檜が高く聳えて居る。その下で静かな水が、見たものの影をみな寫してゐる。この窓の冷い堅い石の縁へ身を屈めて兩手を地面の方から伸ばすと、わたしが二つの身になつて、この身が自分に善く見えて、自分が何だかも善く分るやうな氣がするわね。

問。

人間が死ぬ時に考へるのはこんな考なのかも知れないわ。

戦きて十字を切る。

乳母（疾うからまた窓のところに來て居る。手に鋏を持ち、幹の枯枝を切る。）さ、是れで花の用はすみまし